

ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさとルネサンス

第十号（二〇〇七年三月）

三折と三柱の神

鈴木真紀子

政府もメディアも教育界も本当によくアンケートをとるものだなあと感じます。あの膨大な三折アンケートはどこかで役に立っているのでしょうか？ それとも参考程度のものでしょうか？

良い 悪い どちらでもない
好き 嫌い どちらでもない

正しい 正しくない どちらでもない

この「どちらでもない」という選択、とても日本的だと思いますか？

批判しているではありません。
ただ不思議に感じているんです。

よく分からない問いに対して「わからないからいいや」どちらでもない』にしとこ」とか、あまり興味関心がないときも、三折なら何も考えず無責任に「どちらでもない」に をしてしまえます。記述式ならもう少し考えるかもしれないし、案外まつたくの白紙にするかもしれません。とにかく気楽に「どちらでもない」に をして結果に頓着することもない…。

私たちが日本民族って、こどもっぽいでしょ

うか？

おめでたいのでしょうか？

それとも人智を超えた something great への畏敬と委託の念を、DNAの中に記憶している謙虚な民なのでしょうか？

日本の重要な三柱の神様たち アマテラス オオミカミ、スサノウノミコトそしてツクヨミノミコト。

この三人を並べたら あまりにも個人的で強烈な二人に圧倒されてツクヨミノミコトは影が薄い気がしませんか？

何のための神様？と思うことはありませんか？ でも このツクヨミノミコトの存在こそ、私は三折の「どちらでもない」という発想を生み出す原点だと思っています。

梅原猛さんが「中空構造論」と命名して「無為の中心があつてこそ日本のシステムは安定する」と何かに書いておられたと思いますが、この「無為の中心」の思想…とつても心地よく魅惑的に私には感じられます。

そしてツクヨミノミコトのファンの一として、私は案外この「無為の中心」こそが宇宙森羅万象の均衡と美に大きく貢献しているように思います。

であひ

近藤治平

「人間暮らしておりますと色々な不思議に出合つものがございます。」

これは丁度一年前に、小林幸枝さんのために書き下ろした戯曲「春の夢」の冒頭に、先の日十八日、ギター文化館に行なった「ことば座」旗揚げ公演にあたって書き足した台詞である。

不思議との「であひ」なので「出合つ」と漢字したのであつたが、人生には色々な「であひ」がある。「であひ」の表現も様々である。

「であひ」にはじまって「であい」「出あい」「出合い」「出合」「出会い」「出会」「出逢い」「出遭い」等等。その他にもまだ色々な表現をする「であい」がある。

行方市玉造は手賀のドン突きの雑木林を背に「我家我家（がやがや）」という不思議な、いや愉快な溜まり場がある。

ルネサンスの会の伊藤さんとその友人である彫刻家の宮路さんに案内されて「我家我家（がやがや）」なる不思議の粋狂館（すいきょうやかた…お叱りを受けるかな？）に、小林さんを伴つて出かけた。

実は、この我家我家なる館のことは、以前に伊藤さんから「豚小屋を改装した多目的イベントホール（？）があるそうです」と聞いていたのであつた。

「豚小屋」という言葉の響きが妙に心に残り、もしかしたら「ことば座」の公演場所にならな

いだらうかと考え、一度案内をしてくれるようお願いしてあったのだった。

ことは座は、石岡市柴間のギター文化館を拠点とさせてもらい、ここでは年6回程度の定期公演を行なうことになっているが、このギター文化館を軸としてその衛星的なアトリエホールを幾つか持つて、小さくても確りとしたふるさとを謳う公演を行なうていきたいと考えていたのである。

伊藤さんから話を聞いたとき、伊藤さんらしい言葉で「豚小屋を改装したとか…」という響きが大層心地よく気持ちに入り込んできたのだった。

「豚小屋か。もしかしたら面白いアトリエ舞台が作れるかもしれない」

そう思ったのだった。伊藤さんの声の響きの中に、そう感じさせる何かがあったのだろう。

しかし、実際のところは、伊藤さん自身も「我家我家」なる豚小屋改装の館のことは、訪れたこともなく知らなかったのである。友人の宮路さんから話を聞いただけだったのである。

宮路さんの案内で、我家我家に到着し庭の土を踏んだとき、暮らしの柔らかさを思わされた。この感覚は愉快な「であひ」を発見する時にしばしば感じられるものであった。

勝手に想像し、期待した豚小屋らしきものは見当らなかつた。比較的新しい工房のような建物とその奥に古い母屋があった。母屋の前庭には、何人かの人たちが、椅子に腰掛け握り飯などを齧っていた。雑然とした感じであるが、全

体としては風景に解け合った感じである。

宮路さんはかつての田舎の風景のそのままに

「須田さん居る？」

と返事も待たず家上がりこみ、さあさあ早く上がりなさい、促してくれる。土間には柔らかな空気が流れており、部屋の中からは雑然とした声が聞こえてくる。

「であひ」の予感する風がさらに具体的な音になつて聞こえてくる。

障子戸を開けると突然に「いらっしやい！こんにちは！」のまとまりのない、しかし、雑木林を吹き抜けてくる風のようにバラバラでありながら全体としては一つの流れを作っているように声をかけられる。

嬉しい気持ちがいっかりと創られてくる。

上がった部屋の真ん中には昔そのままの囲炉裏が切つてある。小さな炭火が白い灰を纏わせてチロチロ燃えている。初めてお邪魔する家への遠慮の気持ちはとつくに失せていた。

背に柔らかな日差しを受け、手元には炭火。一番良い席にどっかと腰を下ろして主のお出ましを待った。

前もつて宮路さんの連絡があつて、主は私たちの来訪目的のあらまはこ存知であった。

この我家我家なる不思議の館の主の正体は、須田帆布というカバン、シャツ等の製造販売を行なっている社長の須田栄一氏である。

「何時でも、好きにお使い下さい」

無駄を省いてのストレートな回答に、目的の話は直ぐに終わり、あとは雑木林に似合つたガ

ヤガヤの五目話しとなる。

「そうだ。今夜、向ここの建屋で葵バーが開かれる。お時間があったら来ませんか。そして興が乗ったら朗読舞、どうですか」

そのまま居続けたい気持ちであつたが、一端戻り、夜に再びお邪魔する事にした。

昼間は、須田帆布の商品が展示されたショールームであつたその建屋は、夜には一変していた。ローソクの火明かりではないが、それに似た感じに照明を落とし、和風の高級クラブの雰囲気である。こつて本当に豚小屋だったのだらうか。雰囲気にかけてしまったのか、とつとつ聞くのを忘れてしまった。

若きバーのママム、三人の乙女等、須田ご夫妻、伊藤さん、小林さんと私。静かな素的なであひの夜であつた。

月明かりの雑木林と不思議の館をすつぽりと照らしてくれる中に、恋歌の朗読に小林幸枝が舞いを舞った。何時になく妖艶に思えたのは、月明かりの所為だったのだらうか。それとも心に愉快な「であひ」を持った所為だったのだらうか。

三月二十四日（土）には、この我家我家に笛とパーカッションによる鹿鉄お別れコンサートが開かれる。ことは座も一緒にどうですか、と須田さんに誘われた。演奏者の了解が得られれば喜んで参加させてもらおうと思つている。

鹿鉄存続を声する人達に、鉄のレールを走る

車内でカラオケを歌うだけではなく、名も知れぬ野草の花を愛でるように、文化のレールを敷く思考を持っていたら、持っていたら、生き残る道を見つけたのかも知れない。そんな風に思うのは私一人ではないと思うのだが…。

もしかしたら鹿鉄には「であひ」を喜び、愉快になる心をいつの頃かに、沿線の何処かにガンと揺れた時に落っこし、拾いに戻るのを忘れてしまったのかも知れない、とふと思ってしまうた。

ポピー

小林幸枝

我が家には今、八頭のワンちゃんがいる。

ポピーちゃん(十四歳) 童夢くん(十二歳) 太郎くん(七歳) ナナちゃん(六歳) 桜ちゃん(二歳) 空くん(二歳) アルちゃん(六ヶ月) リールちゃん(六ヶ月) である。アルちゃんとリールちゃんには、只今、里親の募集中。

私は、もともとは猫好きで、猫を飼っていたのだが、主人が犬好きの所為で、私も何時しか犬好きになってしまった。

犬好きの切っ掛けはポピーちゃん。

ポピーちゃんと出会ったのは、水戸の市営住宅に住んでいたときでした。市営住宅ですからペットを飼うことは出来ません。それなのに主人が迷い犬(もしかしたら捨てられた犬)を拾ってきて飼ってしまったのでした。それがポピーちゃん。

ポピーは、コンビ二の前で、誰かが食べ物をくれるのをジーツと待っていた。そして「誰か私を拾って！」と訴えかけているようでもあった。

とても可愛いワンちゃんだったので、思わず食べ物をあげてしまった。買い物を終えて帰るとき、そのワンちゃんは何処かに行ったのか、いなくなっていた。

ところが車に乗って驚いた。そのワンちゃんが主人と一緒にいるのだ。家で飼うのだ、という。市営住宅だからダメだというのに、飼うと言ってきた。根負けした形で、ひとまず連れて帰ることにした。

今夜はともかく、明日にはどうにかしなければならぬと思っていたのだが、僅かの時間でも一緒にいると、もう保健所に連絡して、という気持ちにはなれなかった。結局、内緒で家に飼うこととなったのでした。

そうなると名前をつけなければなりません。初めて室内で犬を飼うのだから、明るい花が咲いたような家族になってくれることを願ってポピーと名付けたのでした。

我が家は二人とも働きに出るので、昼間はポピー一人になります。初日の事。どんな様子に留守番をしているのか気になって仕方なかった。一人で寂しがって吠えているのではないかと、そればかり気になり、終業時間と同時に社を飛び出し、家に戻ってビククリ仰天。

寂しがって吠えている？
とんでもありません。部屋に入るやその光景

を見て、目が飛び出すというのはこういうことだと、知らされたのでした。

ソファは喰い干切られて、バネは飛び出しスポンジが部屋中に散乱、何とも凄まじいありさま。ゴミ袋3袋分の被害。

片付け、掃除をしながら「おしっこは?」「ウンチは?」と探し回ったら、ペランダにしていた。これにはホツとした。

厳しく叱りつけると申し訳無さそうに反省の態度。遊び道具を買っておいてあげないと可哀そうと思い、早速買い出しに。その晩は、玩具で二人で大騒ぎ。そして一緒に布団に寝た。

ポピーは利口な犬。無駄吠えをしません。私たち夫婦が耳の聞こえない事、良く理解しているようです。手話も確り覚えてくれた。食べ物の催促も吠えるのではなく、お手をするように膝に手を上げてくる。水が飲みたい時はボールを啜ってくる。

夫婦喧嘩のときなどは必ず私の肩を持ち、庇ってくれます。私には頼もしい味方だ。

市営住宅で一番困ったのが、散歩だった。内緒で飼っているから、見つからないように連れ出さなければならぬ。最初、大きなスポーツバックにいれて外に出たのだが、袋詰めされるのが嫌だったようで、二度めから決してバックに入ろうとしない。やむを得ず散歩は深夜人目につかない時間にとっさり抱いて出た。

何時かは人に見られ、苦情を言われるだろうなと思っていたら、案の定市役所から連絡が来た。ペットを飼うのはダメです、と。

それで、窮余の申し開きで、聴導大だと説明に行き、黙認してもらおう事ができた。先ずは安堵。

しかし、階下の人には申し訳ないことをしたなと思う。子供さんがアレルギーだったのだ。

水戸の市営住宅に泊り暮らししたのは一年半私の転勤で、石岡に帰ってきた。

石岡の家では次々とポピーの仲間が増えて、リーダー犬として威厳を持って他の犬達を統率していたが、もう十四歳。去年、リーダーをナナちゃんに譲り、今は大きな個室の犬舎にのんびりと余生を暮らしている

ひな巡り

兼平ちえこ

『あかりをつけましょ、ぼんぼりにー』
テンツク、テンツク、お祭りの街はほほえみと愛らしさに包まれました。

“このお雛さまは、いつ頃のですか？”

店主さんが笑顔で説明してくれる。この触れ合いがうれしい。

昔懐かしの玩具屋さんを発見。七十歳代の店主さんのお母さまからの木製のお雛さま。大切に守ってきた温もりも拝見出来ました。

菓子屋さんでは二階に案内され、丁寧なお茶の接待。思いやりの心も一緒に飲み干す。

陶器の店主さんは、昭和三十年頃に残っていた蔵を、どうして壊したのかと嘆いた私に、いやまだまだ残っていますよと、裏口に通してく

れ、

「ほら、あそこにも、ここにもー」
と。

静かにその勇姿を誇っているかのように、蔵の歴史はしつかりと残っていました。

奥座敷に揃う江戸時代のお雛さまを惜しみなく、どつぞと勧めてくれる釣具屋さん。その他沢山の心あたたまるおもてなしを頂きました。

歴史のガイドをしていると、どんなお土産があるのか、との問いを多くうけます。今回のひな巡りで、歴史にちなんだ名菓や名品に出会う事ができました。歴史の里いしおかを唱える時に、食の文化も、より以上に宣伝し、我が店の商品を声を大にして、自慢してほしいと思いました。

ガイドをしていて気になることは、ゴミと汚れの多さです。恥ずかしさと、住む人達の文化の低ささえも感じてしまいます。まず初めに我家の周りから、きれいにしていきたいものです。今回の街中は、工夫された花が飾られ快適でした。

石岡商工会議所女性会、ひな巡り実行委員会のみなさん、美味しい甘酒を馳走さまでした。お雛さまを展示された七十店の皆さま、お疲れ様でした。

広い駐車場のあるスーパー店にはない、やさしさと温もりのある商店街、いしおかのお祭りでは知ってもらえなかった「商都の石岡」を発見してもらえたことを確信します。

最後に一言。せめて期間内の定休日の返上は

出来ないものでしょうか。

上巳の節供ともいわれる雛祭り。今度は五月五日、端午の節供も期待します。

(一口メモに調べてみました)

「上巳(じょうし)」

旧暦三月の最初の巳(み・し)の日を言う言葉で、古代中国の祓い(はらい)の風俗行事が日本に伝わったもの。

節供とは節日(せつじつ)＝季節の変わり目などに神祭を行なう日(の供物(神仏にそなえるもの)の意味から日本語で造語されたと考えられ「節供」と「節句」の違いについては、江戸時代初期までは節供の文字が記されているが、その後は「平素とは区別される日」とか「単なる区切りの日」という意味合いが強くなり節句という字が当てられるようになった。

「草餅と菱餅」

中国の上巳の行事に、野草の汁を入れた餅状のものを作り、これを食べて邪気を祓っていた風俗が日本に伝わり、草餅として広まり、室町時代に蓮の草餅に変化し、江戸の後期には、菱餅に変化したこと、お祝い返しになること、上下が緑色、真ん中に白色の餅をはさんだ三枚を供えていたことが、守貞漫稿(もりさだまんこう)からわかりました。

現在の雛壇に飾る菱餅は、上から桃色、白、緑の順で、桃の花が咲き始めたが、地上にはまだ雪(白)が残っている。しかし、雪の下ではもう若草(緑)が萌えているという春の季節感

を表現したもので、菱形には魔除けの効果があるとされていた。

(祭り万華鏡・茨城県立歴史館発行より)

(一行文)

日日の風に

伊東三子

- ・つい飲むようになった販売機の茶
- ・おばなゆれて誰をよぶ
- ・あざやかに生命もやす名残り花
- ・たくましい老女 稲藁をかかえて過ぎていく
- ・光りの道をわたれば こいしい人のいる
- ・むこうがわのベンチの下に蒲公英の花と吸殻
- ・春風が土竜おどしのかさをまわす
- ・雑木林 うす紫の色を刷いて春を待つ
- ・表通りにゆれる下着 はじらいもなく
- ・しげみの中に洗濯物のゆれている
- ・山門のそばの地蔵 むかえてくれて
- ・地蔵の紅いよだれかけ 足元に黄水仙
- ・紅梅を飾る あとから白梅を添える旧元旦
- ・大銀杏の下 稲荷の旗 音を立てて

(ふるさと歴史物語)

軍師の時代

打田昇二

武田信玄の軍師だった「山本勘助」を主人公とする大河ドラマがNHKで放映されている。戦国時代の三大軍師だと伝えられた人物らしい

が一般には武田信玄を知っていても、その陰の軍師までは良く知らない。現代は、責任のある当事者の無能無知、無責任、無神経によるミスやら、故意やら、お膳立てのお粗末などで何が起るかわからない不安な時代である。日頃は偉そうにしている連中の謝罪と馬鹿げた言い訳が多い。同罪のNHKに言われたくはないが「地位のある者には確りとした軍師を付ける」という暗示なのであるか。

山本勘助の経歴は、成人式を済ませてから諸国修行の旅に出て武術、築城術、兵法(軍略)などを修め、武田信玄に仕えてからは幕僚として多くの作戦を立て武将の一人として活躍した。というものである。しかし同じ三大軍師でも竹中半兵衛は稲葉山城の単独奪取に始まり、天下統一に動く織田信長と豊臣秀吉の下で安土築城に携わったり小谷城からお市の方らを救出したり日本史の主流に影響する実績を残している。また真田幸村は関が原に向つ徳川秀忠の大軍を小城一つで撃退した上、大阪冬の陣・夏の陣では徳川家康を相手に知略を尽くして暴れ勇名を轟かせた。

具体的な山本勘助の功績は各地の合戦に加わったほか武田信玄に作戦を助言し、高遠城・小諸城・海津城などを強化し、甲州善光寺造営奉行を勤めるなど、甲州周辺の歴史に関わっただけであるが、これは主君の武田信玄が天文五年(1536)の初陣以来、永禄七年(1564)最後の川中島合戦に至るまで甲斐・信濃を主な戦場にしてきたからであり、止むを得ないであ

ろう。

山本勘助は永禄四年(1561)九月十日、第四回の川中島合戦の作戦を上杉謙信に見抜かれてしまった。謙信が単騎で信玄に迫る場面では知られた有名な戦いの場で勘助は信玄の本陣を死守するために敵陣深く駆け入り、十三騎を討ち七騎に負傷させる働きをしたが自らも無数の傷を受け壮烈な戦死を遂げた。つまり甲州に居た戦国の龍・武田信玄が天下統一に眼を向ける以前に軍師が歴史から消えていたのである。

武田信玄の行動が周辺諸国の戦国大名に脅威を与えるようになるのは勘助の死後であるが、歴史のコマを逆回しにして見ると、軍師として山本勘助が武田信玄にとらせた作戦で、後世に大きな影響を与えたことがある。それは諏訪氏の血を引く武田勝頼を歴史に登場させたことである。勘助は信玄が滅ぼした諏訪頼重の姫(後に武田勝頼を生む)を重臣たちの反対を押し切つて信玄の側室に勧めた。信玄に滅ぼされた諏訪氏は代々に亘つて諏訪神社の神職を兼ねた武将であり、その影響力が案じられたから、滅亡させられた側の恨みを逆手に取つて武田の跡目を諏訪の血縁で繋ぐという奇策は有効だった。やがて勝頼は勇猛な武将として成人するが、勝頼が元服する頃に勘助は死んでいる。これが残念なことでは家督を継いだ勝頼は父親の意志も重んじず、重臣の意見も聞かず、軍師も置かず、胡麻すりの側近に惑わされて滅亡する。群雄割拠の時代に周辺諸国を抑えることが出来た武将が目指すものは「旗を帝都に掲げる」

つまり織田信長が唱えた「天下布武」である。將軍を擁し朝廷の權威をバツクに日本国中に号令する…その実現のために武將たちは戦っていたようなものだが条件が同じではない。一番に影響するのは地の利である。

目的地は京都だから都に近く街道筋にあり、行く途中に強敵が居なければ良い訳で、織田信長は条件的には一番有利だった。永禄二年（1559）二月に信長は堺見物の名目で八十人程の家臣を連れて上洛の下見をしている。觀光旅行だから戦国時代でも途中で合戦にはならない。抜け目のない信長はこの時に密かに將軍の館を訪れ、室町幕府第十三代の足利義輝に謁見を許された。

ところが、その年の九月には越後の上杉謙信も川中島合戦の合戦を縫って、と言つより敵の武田信玄に手紙を出し「將軍に会いに行くので攻め込んで来ないように」お願いしてから五千の軍勢を率いて上京した。休戦を頼むほうも頼まれるほうもどつかと思うが、謙信の京都行きは織田信長と違つて、あくまで將軍と朝廷とお見舞いする目的だったらしいので信玄も兵を出さなかつた。それならば、ずっと戦争を止めれば良いのだが、この上京で点数を上げた謙信は数年後に「関東管領（かんとうかんれい）」という役職を手にする。

いわゆる東国は都から遠い。室町幕府は鎌倉に出先機関を置き、將軍の一族を管領に任じて関東・東北を治めさせていた。管領の下には「執事」として藤原系の上杉氏（足利尊氏の母親の

系統）一族が付いていた。ところが第四代の管領だった足利持氏が京都と張り合つて自分を公方（くぼう）將軍の尊称）と呼ばせたため、執事の上杉氏が管領に繰り上がった。実は、石岡に続いていた名門の大掾（だいじょう）氏が衰退したのはこの公方の所為なのである。

上杉氏も扇谷、山内などの系統に分れて一族で権力を争い、石岡にも所縁のある太田道灌が仕えていた扇谷系は、敵の策略に乗つて軍師としての道灌を殺害してしまつたために早々と滅亡し、策略を用いた側の山内系も道灌暗殺の命令を下した上杉顕定の孫の代で当主・憲政が家名を保てず倒産し、家臣の長尾氏に家系と家名とを買つて貰つた。譲られた人物が長尾景虎、後の上杉謙信である。景虎も上杉謙信となつたからには「管領」の地位が欲しい。

一度は休戦に応じた武田信玄であるが京都へ行つた謙信が將軍から「関東管領」の内示を受けたことを知りカンカンになつて怒つた。武田氏は「甲斐の守護」という地位にあつた。甲斐の守護は山梨県の知事と県警本部長程度の官職に過ぎないが、新羅三郎義光を祖先とする由緒正しい源氏である。「武田」の姓は茨城県ひたちなか市武田（古代の武田郷）に由来する。武田郷一帯は大掾一族の吉田氏が開発したようで、平安時代中期に八幡太郎義家が東北地方の争乱を鎮めた功績で朝廷から領地の一部を買つた。義家は弟の新羅三郎義光に武田郷などを与え、子の義清が武田郷を継いだのだが吉田領、鹿島神宮神官領などの境界と重なつていたため紛争

が起こり、訴えられた義清が甲斐の市河庄へ飛ばされたのが武田氏の始まりである。甲斐国は源氏の支配地だった。なお常陸国に勢力を張つた佐竹氏は、義清の兄の義業（よしなり）を祖としている。

戦国ので官職などは畑の肥料にもならないが現代の政治家などが勲章を欲しがるように、当時の武將たちも肩書きが欲しかつた。関東管領は甲斐の守護を支配する官職になる。「おのれ謙信め！」信玄は怒り、休戦協定は破れて永禄四年（1561）、「鞭声肅々夜河を渡る（べんせいしゆくしゆくよるかわをわたる）」という有名な詩で知られた第四次の川中島合戦が盛大に開始された。

石岡（八郷地区）に城を構えていて上杉謙信とも仲良しだったと言われる智將の太田三樂（太田道灌の子孫）は、この合戦を評して「最初の戦いでは百%謙信の勝ち、後半の戦いは七〇%が信玄の勝ち」としているとか。武田軍は山本勘助のほか副將の武田信繁、将官級の武將一人、高級幹部級の武將五、六人を含む四千五百人の戦死者を出している。これに対して上杉軍の戦死者は三千五百、指揮官級の戦死者は居なかつたようである。しかし、合戦の場から退いたのは謙信のほうで、信玄は新たな領地を得ている。総体的には竜虎相い譲らざる戦いだったのであるとか。兵士の犠牲者八千は多すぎる。その頃の関東・甲信越・東海道筋は相模（神奈川）・伊豆に北条氏、駿河（静岡）・三河（愛知）に今川氏、甲斐（山梨）・信濃（長野）に武

田氏、上野（群馬）・越後（新潟）に上杉氏が勢力を張っており、武蔵（東京・埼玉）は北条勢力下ながら争奪の場だったらしく、桶狭間の合戦に勝利するまでの織田信長は尾張（名古屋地方）の新興小勢力に過ぎず、徳川家康は名前を松平元康といい今川に属する一武将だった。

四度に亘る川中島合戦は東国で竜虎に例えられた武田信玄と上杉謙信とが定期的に同じ地域で戦っていたようなものであり、それに牽制される北条氏の動向とも絡んで、天下を目指して力を蓄える織田信長にはプラスになっていたと思われる。信長にとって問題なのは東にいる今川氏で、三河・尾張国境の小競り合いは繰り返していたが、もし、京都を目指す今川義元がその気になって動き出したら大変な事になるのである。

ついでに、都から離れているとは言え東海道の東端にある茨城地方（常陸国）はどうかと見れば、おおむね東北の佐竹、県南の小田の二大勢力に水戸の江戸氏、石岡の大掾氏、真壁の真壁氏などの小勢力が巻き込まれ部分的な合戦が行われていたと思われる。特に佐竹氏は上杉謙信に近く、小田氏は北条氏の影響下にあつたようなので謙信は何度か小田城まで攻めて来ている。そのせいかどうか太田三楽（片野城主）と息子の梶原政景（柿岡城主）は、始め小田氏に付き、後に佐竹氏に属した。既に述べたように太田三楽は上杉謙信の親友だった。

永祿三年（1560）、謙信や信長の京都市行きに刺激された訳ではなからうが駿河・遠江・三

河の三国に加えて尾張（愛知）の一部を侵略し、百万石と言われる領土を獲得した今川義元が、ついに都へ行こうと大軍を率いて駿府城を出発した。今川氏は八幡太郎義家の宝剣を伝える源氏・足利氏の流れを汲む名門で有り、上杉の宗家とも繋がりがあつた武将で、街道一の弓取りと称されていた。

戦国大名で当時の三強を挙げれば今川、武田、上杉、それに継ぐのが小田原の北条であつたろうか。鎌倉幕府を牛耳つた北条氏と区分するため「後北条氏」と呼ばれるこの家は、今川の居候だつた北条早雲こと伊勢新九郎が一代で興したものである。多少、怪しいところはあるが本人の申告では平国香の孫・維衡（これひら）を祖先としている。桓武平氏・国香の嫡流は故郷の常陸に大掾系が残り、国香の嫡男・貞盛の子孫は伊勢の国に土着して地盤を築いたらしいので、伊勢氏を名乗つたからには石岡のために信用しなればなるまい。それはともかく、その北条氏は武田と上杉に挟まれて上洛は覚束ない。武田と上杉は睨み合いを続けている。そうなる今川氏には上京のチャンスだつた。

都へ進軍を始めた今川義元の軍勢は四万五千とする説と二万五千だという説がある。その差の二万は大きい。守る方の織田信長はいくら掻き集めても三千ほどの軍勢しか集まらないので、通常では全く勝ち目が無い。第一、当時の信長には軍師・竹中半兵衛も居なければ知恵者の木下藤吉郎（豊臣秀吉）は就職三年目ぐらゐの雑兵である。「義元動く！」の急報が信長の

居た清洲城に届いたのは五月十八日の夜だと言われる。義元が駿府を出陣したのは十二日らしいので既に一週間も経っている。今川軍は松平元康、朝比奈泰能（あさひなやすよし）らを先鋒として織田勢力下にある尾張の城を陥落させながら京都を目指して総大将が進軍中なのである。

清洲城では直ちに緊急重役会議が開かれたが、敵の大軍を前にした弱小勢力に良い案が出る訳もない。第二次大戦中の軍部だと国民には「大和魂で防げ！」とか言いながら、天皇と大本営を安全な山中に移すのだが、変り者と言われた織田信長は「大軍相手では籠城しか無い」と主張する重臣の意見を退けただけで何の対策も示さず指示も出さない。城内に沈痛な空気が漂うなか、深夜に出先の城二つが敵に囲まれたという知らせが届くと、良く知られているように信長は立ち上がってカラオケも無しに「人間五十年」と愛唱歌を三度歌い見事な幸若舞いを見せてから立ち食いで夜食をとり「いざ、出陣！」と叫ぶより早く馬屋に駆け込んで藁の中で寝ていた馬番の木下藤吉郎を叩き起こした。

織田領内に入った今川義元の頭には「負け」という言葉は入っていなかった。自分は都の將軍と同じような高貴な身分だと思ひ込んでいたから戦争状態なのに馬にも乗らず神輿のように担がせた輿に座つて悠然と軍を進めていた。合戦は先鋒隊が有利に進めている。本隊は生意気な尾張のガキ織田信長の軍勢が出てきたら一気に蹴散らして京都まで行ける。何も焦る必要は

ない。

大軍を率いた今川義元が、織田信長の小勢力に敗れた戦いに「桶狭間の合戦」という名称が付けられたのは後世のことらしい。正確な戦いの場所も特定出来ないようだし多くの謎があるという。信長の奇襲攻撃を受けるような狭い場所に、なぜ今川の軍が本陣を置いたのが最大の疑問だとか：ただ現在の地図では合戦場の推定地である愛知県豊明市から隣の名古屋市にかけて陸地が広がっているが、当時は海岸線がかなり入り組んでいたであろうから、敵地を進む今川義元にすれば前方に織田の本拠・清洲城がある。強行軍で海岸沿いを通過する際の敵襲を考えると、此処は急がず軍勢を休ませたに過ぎないと思われる。その際に今川義元は織田信長の戦法を予想し、その裏をかいたつもりで狭い谷間を休憩地に選んだらしい。旧暦五月は梅雨時である。曇り空からは時雨も降ってきた。こんな状態で兵力の少ない敵も攻めて来る筈がない。

信長が清洲城を出たときには従う部下が五騎だったという。十数キロ離れた熱田神宮で二百人の兵を集めたが、未だ作戦は立てていなかった。信長は近くの砦（とりで）に入って情報収集に努めた。追々軍勢も増えてくる。その時に今川軍の動きを詳しく逐一報告していた家臣がいて、信長が予想していた進路を変えて敵は桶狭間の山あいでは休息するらしいと知らせてきた。その家臣の名は梁田出羽政綱（やなだてわかまさつな）と伝えられており、政綱は信長に「桶

狭間奇襲」を進言した。家臣の意見など聞かない信長も、この時ばかりはすぐに提案が採用され合戦は織田軍の大勝利に終わった。臨時の軍師がいたことになるが、信長の名声に潰されて軍師・梁田政綱の名は残らなかった。

今川義元の死によって戦国大名の勢力関係が大きく変わった。織田信長の名声が高まったことは当然ながら、敗れた今川氏は惨めだった。義元には二十三歳の嫡子・氏真が居たのだが、この人物が良く言えば平和主義、悪く言えば武将としては失格、父の仇討に尾張へ攻め込む勇氣もなく人望も薄く、家臣や隷属していた武將たちが次々と離れてしまった。幼時から人質同然に今川の家臣とされていた松平元康は譜代の武士団に推されて郷里三河へ戻り、名前を徳川家康と改めて周辺の今川領を攻撃し始めた。武田信玄にとつても海岸部への南下と都へ上るチャンスが到来したのだが、長年に亘る越後勢との喧嘩にケリをつけなければならぬ。謙信と信玄とは翌年の秋に川中島で大掛りな合戦を繰り広げた。山本勘助が戦死した戦さである。

その頃、諸大名が行こうとしていた京都では室町幕府の権威が落ち、第十三代の将軍・義輝が家臣に殺され、第十四代は足利一族の中から家臣が探してきて将軍に据えるといったことが堂々と行われていた。永禄八年（1565）、その事件に巻き込まれ幽閉されていた足利一族の僧が、幕府重臣の細川藤孝に助けられて越前福井の朝倉氏を頼った。この僧が室町幕府最後の将軍となる足利義昭である。しかし朝倉氏は

現地に根を張った浄土真宗門徒たちの反乱、つまり一向一揆の鎮圧に手を焼いており將軍擁立など出来なかった。そこで野心家の義昭が目をつけたのが、強敵・今川義元を僅かな兵力で倒し、美濃も平定して今や戦国大名のホープとして脚光を浴びている尾張の織田信長である。

越前に居た足利義昭から織田信長に宛てて「將軍株の購入」を勧める手紙が頻りに届られた。信長も利用価値があると見て、この誘いに乗った。慎重な信長は先ず周辺を固める作戦で諸大名の動向を探り、脈のある武將には婚姻政策で当面の危険を除去することとした。手始めに選ばれたのは戦えば強敵となる二人の武將、徳川家康と武田信玄である。川中島の大合戦があった翌年の永禄五年（1562）早々に織田信長と徳川家康は同盟を結んだ。家康は信長の推挙で三河守となり、やがて嫡男の信康に信長の娘を娶ることになる。

信長が信玄に着目したのは、精強を誇る甲州軍団の存在もさることながら信玄が一度も上洛したことが無いことである。自分が持つ天下への野心が少ない武將だと判断したのである。織田信長は、妹のお市の方を近江（滋賀）の浅井長政に嫁がせる以前に信玄宛ての信書を送り、自分の姪を養女として信玄の子・勝頼に娶らせることに成功した。信長の妹婿・美濃の苗木城に居た遠山氏の息女だという。遠山氏は藤原系で源頼朝の重臣だった加藤景廉（かとうじかげかど）の子孫である。現在の中津川近辺を領して京都の公卿とも繋がりを持つ名門である。

余談だが、その藩は江戸時代末期まで残り継嗣が絶えた際には府中（石岡）藩の松平氏から養子が入っている。勝頼と信長の姪との間には男子が生まれ「武田信勝」と命名された。

信勝の出生を誰よりも喜んだのは武田信玄だと伝えられている。信玄は勇猛な勝頼を重視してはいたが諏訪の血を引くために武田の跡目にはしなかった。しかし、その子・信勝を躊躇無く武田の継嗣と定め、信勝が成人するまで勝頼を後見人に指名したのである。その結果、信玄亡きあとは武田勝頼が自動的に甲斐の国の主になった。信長や信玄の思惑とは違ってしまったのである。

歴史を客観的に顧みて「クレオパトラの鼻がもう少し低かったならば…」などと言われる。歴史の内なる部分では人間関係が大きく作用しているから、例えばクレオパトラが魅力の無い女性であったならエジプトへ遠征したシーザーもアントニウスもプトレマイオス王朝の内紛に関わることはしなかった。エジプトの王女であったクレオパトラはギリシア人だから目鼻立ちがハッキリしていたであろうが、他の国で騒がれているほどエジプトでは人気が無い。ついでに触れておくと、エジプト人が美女に挙げているのは「ネフェルティティ（遠くから来た美女）」と言う名で呼ばれた第十八王朝アメンヘテプ四世の正妃、黄金の仮面で知られたツタンカーメン王の義母である。胸像も残り、土産物のペンダントなどもあるが、美貌の上に首が長い。「遠くから…」とは、この女性がメソポタミア

文明の正統を継ぐミタン二国王女だったからである。

そこで、日本の歴史でもクレオパトラの鼻のように「…もう少し、もし…」を適用させて貰うと、当時、勇猛果敢な甲州軍団を率いる武田信玄の息子と新興勢力である織田信長の養女（実の姪）とが結婚して武田信勝が生まれたことを機に武田・織田の勢力が連合し、さらに徳川が加わって天下統一を目指したならば、後に織田信長・豊臣秀吉・徳川家康と三人が苦勞をしたよりも早く戦国時代が終ったのではなからうかとも思う。勿論、東国には北条、上杉などの勢力があり、近畿には織田信長が手を焼いた浅井、朝倉らが居たのだが武田氏は北条、浅井、朝倉に近かった。問題は武田信玄と川中島を巡って張り合っていた上杉謙信だけである。この武將は他の武將たちが上洛に苦勞していた中で武田信玄らとの忙しい合戦の最中にも関わらず二度も京都まで出かけている。これは権威の落ちた室町幕府の將軍を支えたいという意図だったようで、天皇にも拝謁し何の役にも立たない官位を貰い、有名無実の関東管領という地位に就けて貰って感激している。將軍の命令ならば和睦にも応じたのではないか。

もし、山本勘助が信長・秀吉・家康のいずれかの軍師だったら活躍の場も広がり日本史が面白くなったかも知れないし、もう少し長生きして、それこそ奇策を廻らして武田・織田・徳川の連合でも画策していたら…と考えたのだが、その前に重大なことに気付いた。武田勝頼に嫁

ぎ、信玄の孫・信勝を生んだ織田信長の姪が、出産の後に夭折したらしいのである。このことはクレオパトラの鼻どころではない重要な歴史の「もし」になる。この女性が死んだことで武田・織田を繋ぐ主要な糸が切れてしまったと推定する。

それでも武田の武力を恐れた信長は、他家の養子になっていた自分の末子が人質から勝頼の養子になったのを黙認している。さらに信長は織田家嫡男の信忠（本能寺の変で信長と共に戦死）の正室に武田信玄の五女（お松御料人）を与える約束を交わす。この縁組は元龜三年（1572）に破談となってしまったが、ここでも「もし…」を考えるならば武田・織田連合の芽があつた。

武田信玄も織田信長も一筋縄ではいかない武將であり、その二人が天下を目の前にして仲良くするとは考え難い面もあるが、信玄は勝頼に「自分の死後は永年の敵だった上杉謙信を頼るよう…」に言っていたようで、言わば融通性があり既に高齢でもあつたから、それこそ軍師として山本勘助が生きていて織田方の軍師・竹中半兵衛と相談でもすれば世の中は変わったであろう。

織田信忠と武田松姫の結婚が破れた原因は「三方ヶ原の合戦」にある。この戦さは武田信玄と徳川家康との対決である。しかし家康は信長の傘下だから応援の軍勢は送ったであろう。合戦を機に武田と織田との関係が怪しくなるのも仕方がない。徳川家康が生涯で一番、恐ろし

い目にあつたのがこの戦さであり、馬に乗って逃げる途中に大便を洩らした！などという話しが伝わっている。

それより先、永禄十一年（1568）秋には周辺強豪との講和が得られたと判断した織田信長が足利義昭の要請を受け入れ、六万の兵を率いて上洛した。徳川家康も武將の一人として従軍している。信長は近畿地方で抵抗する弱小武將の居城を攻略しつつ二十日ほどで都入りを果たした。信長の力により足利義昭は第十五代の室町幕府・將軍になった。信長は越前（福井）の朝倉義景に対して自分が擁立した將軍に挨拶に来るように要求したが、信長を「成り上がり者」と軽蔑する義景はこれを無視し続けた。

朝倉氏は足利一族・斯波（しば）氏の重臣で、斯波氏から受け継いだ形で代々越前の守護に任じられていた。始め足利義昭が朝倉を頼つたのもその関わりがあつたからである。一方の織田信長は同じく斯波氏が守護に任じられていた尾張で代々に亘って守護代（代理職）を務めた織田一族の末流であつた。信長は自分の祖先は平重盛、つまりは平国香の子孫だと言っているが、これは明らかに怪しいらしい。それでも天下人となつた信長が平氏を称してくれるのは石岡にとっては名譽なことかも知れない。朝倉義景は自分に出来なかつた將軍擁立を簡単にやってのけた信長への嫉妬から「成り上がりだ」と言ったのである。

朝倉義景は自分の住む福井が「越前の京都」と呼ばれることに満足していたような武將だつ

たから、今川義元と同じで貴族だと思ひ込んでいたらしいが元を正せば先祖は一介の地方武士だつたらしい。先祖が応仁の乱で西軍から東軍に寝返つたのがツキの始まりで、遂に越前の守護になつた家系だから本物の成り上がりである。そんな奴に悪く言われた織田信長は本格的に怒り四月に元号が元龜元年に変わる永禄十三年（1570）自ら三万余の大軍を率いて朝倉攻めを実行した。高貴な身分？の朝倉義景は合戦に出ることが嫌いだつたらしい。

鬼と化した信長に攻められて城一つが一日で落とされ、総大将の義景は渋々出陣したところ二つ目の城も危なくなつたので慌てて本拠地の一乗谷城へ逃げ帰つた。これで朝倉氏は滅亡するところをドラマなどで有名な「お市の方の夫・浅井長政の裏切り」で助かつた。危機を脱した信長は二ヶ月後に徳川家康の協力を得て琵琶湖北方に出陣し、「姉川の合戦」で浅井・朝倉連合軍を叩き潰す。それでも浅井・朝倉の両氏が四年後まで存続したのは、その頃、武田信玄と徳川家康が衰退した今川氏の領土獲得を巡つて対立し、また織田信長は一向一揆やら比叡山の僧兵などの抵抗に手を焼いていたからである。元龜三年（1572）、正月早々に上杉謙信と武田信玄は六年ぶりの合戦に臨んだ：といつても、今回は川中島ではなく利根川上流が舞台だつた。現在の前橋市に在つた石倉城は、関東進出を図る目的で謙信が抑えていたのだが、早くから武田側に取られていた。その頃、北条勢が北関東に進出を図つたことに呼応して信玄も

石倉城まで来ていたのであるうか。急を聞いた謙信は雪の越後から駆けつけて対陣したのだが、詳細な記録は見当たらない。正月のこともあり本格的な合戦にはならず済んだと思われる。

信玄が念願の京都市を計画したのは、その頃だつたかも知れない。関東を抑える北条氏が、謙信との和約を蹴つて信玄に近づいてきたので越後への備えは強固になり、一方で信玄と共に今川領を狙う徳川家康が浜松城に移ってきたことは信玄に西への警戒と野心を芽生えさせることになつた。織田信長は浅井・朝倉攻めに執念を燃やすほか各地の宗教勢力に狙われて動きがままならない上に、信長の政策を危険に感じる朝廷の取り巻き公卿から上洛を期待する便りが信玄に届いていた。折しも信玄に宛てて、信長と戦つ本願寺から支援の要請があつた。実は宗祖・親鸞の子孫である顕如上人の奥方は公卿の出で、信玄夫人の姉になる。軍師の山本勘助は既に川中島の合戦で戦死しており戦略的に信玄の行動を分析し意見する者はいない。信玄の実質的な後継者である武田勝頼は勇猛果敢な若武者に育ち、信玄も満足していた。軍資金は有名な甲州金山から採れる黄金が山ほどある。甲斐の龍と恐れられた武田信玄が遂に動き出したのであるが、実は戦略的状况のほかにとどうしても都へ上らなければならぬ大きな理由があつた。決心をする直前に信玄は健康診断を受けたのだが、その結果、結核だか肺癆だか呼吸器疾患が重篤であると判つた。「余命幾許も無し」と医者はいひ、信玄は、旗鼓を京師に建つれば、

則吾れ死すと雖、憾みず（きこをけいしにたつればすなわちわれしすといえどもつらみず 都に行つて天下に名を成せれば死んでも思い残すことはない）」と決心したようである。

元龜三年（1572）十月三日、秋の農作物取り入れも目安がついたと判断した武田信玄は三万八千の軍勢を従えて上洛の一步を踏み出した。いわゆる武田二十四将と称された山県、秋山、小幡、真田、馬場、内藤、一条、土屋らの武將で川中島合戦の生き残りが従つた。お馴染みの「風林火山」の旗印には「天上天下唯我独尊」と、いかにも信玄らしい文句が付け足され自信の程が窺える陣容で信濃国を南下し遠江国に入った。徳川家康は浜松城で防ごうとして待ち構えたが、信玄はこれを無視して素通りし三方が原まで進んだ。恥をかかされた家康は、信長に応援を求めてやつと揃えた一万ほどの兵力で挑みかかったが見事に敗北して浜松城へ逃げ帰つた。一方で武田軍は別働隊を信州から美濃に進め、恵那地方の岩村城を奪つた。この城には、織田信長の末子が養子に入っていたのだが武田軍に連行され人質となつた。これらの出来事により武田と織田は完全に敵味方となつてしまった。

三方ヶ原合戦に大勝利した信玄は浜松城の家康などには眼もくれず北東に進んで、現在のJR飯田線が走る愛知県南東部で年を越し、新城市にある野田城を囲んだ。城中には笛の名手が居て合戦が止んだ夜に笛を吹いていた。見事な笛の音に惹かれて敵陣では信玄が場所を決め

て聞いている。城方ではそれを察知して鉄砲を放ち信玄を射殺した」という説もあるのだが、これは本当ではなく、合戦の指揮と行軍とで病状が急激に悪化したようだ。野田城を落としてから豊川を十数キロ遡つて旧・鳳来町の長篠城に移り、様子を見ていたが入院させてもダメな病人を城に入れても直る訳がない。

重臣たちが息子の勝頼に言つて、一先ず軍勢を安全な甲斐に引き上げることにした。徳川家康も一度叩かれていいるから攻撃はしてこない。軍勢を信濃の駒場（長野県飯田市近郊）まで引き揚げたときに武田信玄は勝頼を枕元に呼んで「上京出来ないのは心残りだが、俺が死んだと判つたら周りの敵は一気に攻めてくるだろう。三、四年は喪を秘して国力の充実を図れ。それには部下の扱いが大切だ。力がついたら都へ攻め上り、俺の悲願を果たしてくれ」と遺言し、合戦に明け暮れた五十三歳の生涯を閉じた。この遺言は一応は守られ、山梨県塩山にある恵林寺で僧侶千人を揃えた武田信玄の盛大な葬儀が行われたのは丁度、三年後の天正四年（1576）四月のことである。

宿敵だった上杉謙信は和睦した北条氏から信玄の正式な訃報を聞いた。使者が到来したとき謙信は食事中だった。「信玄死す」と聞くと、謙信は思わず箸を投げ捨て、「我は好敵手を失えり世に復（また）此の英雄男子有らんや」と嘆いて暫くの間は涙が止まらなかつたと言つた。武田の重臣たちはかわるがわる勝頼に対して上杉謙信との和睦を提言したり織田、徳川と事を構

えないように忠告したのだが、勝頼は葬式の日取りだけは遺言に従い、あとは父親の遺言に反発するかのよう遠江、三河、美濃への侵略を開始した。

天正二年（1574）、武田勝頼は徳川家康の居城・浜松から四十キロほどに迫り高天神城を攻略した。駿河湾岸から遠州灘沿いを通る浜街道の要衝で、浜松城防衛の前線基地である。家康は救援も叶わず、援軍要請を受けた織田信長も動けなかつた。この勝利で勝頼は驕り、敵が恐れているのは猛将・武田信玄の幻だと気づかず自分の武力を過信した。勝頼は美濃に確保した長篠城を足場にして織田・徳川の領内を侵略し、都への足掛かりを求め出した。戦略や方針に異議を唱える累代の重臣たちは遠ざけられて、合戦を知らないゴマスリ武士が回りを取り巻いた。勿論、山本勘助に代わる軍師は居ない。

万策尽きた武田勝頼が織田家の血を引く嫡男・信勝などと共に天目山（笹子トンネルの北方）で自刃し、名門・武田氏が滅亡したのは天正十年（1582）三月、織田信長が本能寺で討たれる二か月ほど前のことである。しかし、事実上は天正三年（1575）五月に行われた長篠の合戦で勇猛を誇つた武田騎馬軍団は織田・徳川連合軍が馬止めの柵越しに撃ち出す鉄砲で壊滅的な損害を受けていたのである。この合戦は日本の史上最初に「銃」が大量に使用され従来の戦争形態を変えた出来事とされている。進めない柵の前で狙い撃ちされたら全滅することとは子供でも判るのに武田軍は突っ込んできた。

織田信長は五百丁の鉄砲を揃えていたと言われるが武田軍にも鉄砲は有った筈である。それどころか、日本に鉄砲が伝来したとされる天文十二年（1543）より前に異国の商人が持ち込んだ鉄砲が武田信玄に渡っていたらしいし、武田軍も各地の戦鬪で鉄砲を使用している。長篠の合戦では武田の先行きに絶望した譜代の武将たちが無駄死を承知で弾丸の前に飛び出したのである。

信玄の死を知らない織田・徳川の連合軍は正面から戦っては勝てないと思いい〇〇七のように謀報で敵を誘き出そうとしたようである。密かに探らせると信玄は死んだか、生きていても入院中かで戦陣には加わっていない。血気盛んな勝頼が指揮を執っていて側近の意見が重視され、戦に慣れた重臣たちは疎んじられている。これを利用してにした。信長の有力な武将が偽って「武田方に寝返つても良い」と勝頼の側近に申し入れた。慎重な信長は、味方にもスパイが居ることを見越して大勢の前でその武将を罵倒して大恥をかかせた。スパイがこの状況を報告したから、勝頼の側近は「敵將の寝返り」があると確信し一斉攻撃論を主張した。これに対して重臣たちの反対意見は否決された。

これで作戦を完成させた信長は、長篠城を問近にのぞむ設楽ヶ原に柵を設けて待ち構えたのだが、武將は一人も配さず普段は武士の仲間にも入れてもらえない四千人の足軽が合戦の主役として登場した。織田・徳川連合軍一万八千、押し寄せる武田騎馬軍団の主力が六千、準備万

端整ったところで織田方の別働隊は念のために敵をおびきだす目的で鳶ヶ巣山の砦を急襲させた。講談でお馴染みの大久保彦左衛門は、この合戦が初陣で一番槍の手柄を立てたのである。

もし信玄が生きていたら…長篠の合戦の勝敗は予測がつかない。何より信玄が病みさえしなければ破竹の勢いで都に上つたかも知れない。有力な武将たちは常に同盟したり敵対したり忙しかった。信長は長篠合戦の前後に上杉謙信と縁組を結び同盟を図っている。戦国時代の政略結婚が敵味方の関係で破れ易いのは仕方ないが、それでも百%当てにできなかった訳ではないから、友好関係が壊れた後の怒りや恨みは深い。信長は長篠の合戦で武田勝頼の軍を破り、天目山で自害させてから勝頼と信勝を晒し首にしている。信長は自分に従わない者を徹底的に抹殺したのである。それが原因かどうか、間も無く本人も消える。

有力な武将には有能な軍師が居た。理想的な軍師は、武將の欠点を知り尽くしてそれを補うことであろうか。武田の軍師・山本勘助は武田氏の将来を考えて勝頼を戦国の世に登場させたが、父親の名声を背負った勝頼は功を焦り信玄のように戦略を巡らすことを忘れ、軍師も居かず自滅した。

複雑化する現代でも人を導く立場の者には、日露戦争で大山元帥を補佐した参謀長・児玉大將のように自分の地位を下げてでも尽くす私利私欲のない優れた軍師が必要だと思ふ。経費を誤魔化したり、違法な仲介をしたり、肩書を悪用

したり、強欲で阿呆な軍師と間抜けな武將のコンビでは日本は良くならない。

編集後記

今月で鹿鉄が終わりとなる。石岡駅の歩道橋の上には、連日鉄道ファンが消えゆく車両をカメラに収めようと、手すりから身を乗り出す姿がある。

もつ三十年ほど前である。工場経営に関する原稿の依頼を受けた。当時は、消費は美德の風潮で、生産工場も機械は短いサイクルでの使い捨てであった。これを改める発想が欲しいというものであった。当時は、機械は使えば故障するものという考えしかなかった。しかし、理論的には故障はしないものである。これを何とか解らせることが出来ないか、というものであった。それで「故障とは人が故意に障害を起す事を言ふ」と定義した原稿を書いた。

書いた当時はそんな馬鹿な、と言われたが、今ではこの定義は当然のこととして理解されている。しかし鹿鉄にはこの原稿を読んだ人は居なかったのだなと少し残念に思うが、読んでも工場と鉄道とは違ふとしか言わないのだから、と消えゆくローカル線を見ながらちよつと寂しくなった。（白井）

編集事務局

〒315 0001

石岡市石岡13979 2

0299 24 2063

（白井啓治方）